

ラダックにおけるチベット仏教

矢崎 正見

はじめに

インド独立後、1957年以降、インド連邦のジャム・カシミール州に属することとなったラダック地方は¹⁾、その人口約20万人の大部分がチベット仏教の信奉者たる、いわゆるラマ教徒である。その地域内にヘミ寺院 (Hemis; Leh Gum-pa)・シャンカール(Shankar Gum-pa)・アルチ (Alchi)・ティクシェ (Thiksey; Tikse) 等をはじめとして、180 か寺にも及ぶ寺院が存するといわれている。その文化の様式・生活の実際も古いチベットの色彩を保存し、今日、西チベットもしくは小チベットと呼ばれているのである。住民の大部分がチベット系民族、もしくはチベット系混血であるにはせよ、千数百年の長きに亘ってチベット仏教を基盤とする文化と伝統がこの地に受けつがれている事は一種、注目すべき事実である。今日ではこの地域の中心地レー(Leh)と中共治下チベット自治区の主都市であるラサ(Lha-sa)間に La-dakh-Lha-sa Trade Routeが開かれているが、地域的にはチベットの中心圏ウ(Dbus)地方に対して、遙かに西に位置し、むしろ回教圏に近く、事実、その歴史のなかで、数度に亘ってイスラム教徒の侵入を受け、時にはラマ教寺院に多大の打撃を被り、あるいはシーク教徒によって征服併呑を余儀なくされる等の事実があった。それにもかかわらず、今日、厳としてラマ教圏として、チベット仏教を保持し得ている所以のものは何辺にあるのであろうか。特に、チベット地域が1950年の中共によるチベット解放軍の侵入以降、中共領チベット自治区となり、ラマ教徒にとって精神的支柱である第14世の現ダライがラサのポタラ(Potala)宮殿を離れてインドに亡命中である現在、政治的地域区分からはインド領であるラダックの地が、宗教的には回教もヒンズー教も受容することなく、ラマ教の伝統を受継いでいる事実は刮目すべきであろう。

本稿においてはこのようなラダックにおけるチベット仏教の実態、歴史的変遷の一端にふれ、それによって、ラダックにおけるチベット仏教継承の根拠を究明しよう

とするものである。

(1)

ラダック地方の行政的変遷は初期の吐蕃王朝への隷属の時代、中期の独立期、そして後期すなわち19世紀に入ってイギリス領インドへの編入を見、インド独立後の今日、インド領のジャム・カシミール州に編入され、インド連邦に併合された現在の状態に到ったまでの三期に分けることが出来よう。

ラダック地方そのものの歴史が何時から始まったのか、平均標高4,000mに近い荒蕪の地に、どのようにして人びとが住みつき生活し、文化を持つようになったのかを史書の上でこれを明確にすることは困難であるが、その出発点は吐蕃王朝がいわゆる有史時代に入った頃と考えてよいであろう。そして、吐蕃との交流については、チベット開国の王、ソツェンガムポ (Sron-btsan sgam-po, -649) がその使節トンミサムポータ (Ton-mi sam-bho-ta) 等をインドに派遣し、インド文化の吸収に当らせたことは広く知られる史実であるが、トンミ等が帰国後、作成した今日のチベット文字はネパール文字であるランツァ (Lantsha, Lañ-tsa) 体とカチュ (Kha-che) すなわち、カシミールの文字を模倣して作られたといわれ、また、トンミサムポータが派遣されたインドの地が、“ラダック年代記 (La-dwags rgyal-rabs)” の記述によると、

Thon-mi A-nuḥi-bu la gser-bre-gaṅ bskur tas, yig-ḥkhor-bcu-drug daṅ-bcas te, kha-cher yi-ger slob tu btan-no. ……Bod-skad daṅ bstun nas gsal-byed ṅi-ṅu-rtsa-bshi drug riṅs bcos nas gsum-bcu mdsad. Gshan yaṅ kha-che na-ga-riḥi yi-ge daṅ bstun nas bsgyur-ro. ²⁾

トンミ、すなわちアヌの子息を黄金1テをたざえ、16名の従者と共にカシミールへ文字を学ぶために派遣した。……チベット文字にふさわしきよう、24文字の子音と、6文字のriṅsとにより30文字を作り、それらは更にまた、カシミールのナガラ文字によりて、決定

したのであった。

とあって、カシミール地方となっているから、ラサからカシミールヘトンミサムポータが向ったとすれば、あるいはラダック地方をその往還に通過したとも考えられ、ソツェンの時代に、すでに当時の吐蕃のウとラダックの間に直接的ではないにしても、交流の事実があったとも思えるのである。かくて、ラダックの吐蕃隷属期が6世紀末から7世紀に掛けて始まったとして、その最盛の時期はソツェンを去ること約100年、吐蕃王期の隆昌期であったティソンデツェン (Khri-sron lde-brtsan, 754—797) の時代と推測される。なぜならば、ティソン治下における吐蕃の版図はその西方において、パミール高原をはるかに越えてアラピラ・トルコ等と境を接したといわれているから、当然、その領域内にラダック地方も含まれていたと考えられるのである³⁾。

しかしながら、チベット史に顕著なランダルマ (Glan dar-ma) の排仏事件と、その後、ランダルマが弑せられ、チベット王統の断絶を見、チベット本土に各豪族の抬頭したいわゆる戦国時代が招来された9世紀末頃から、吐蕃王朝の武力的束縛を離れたラダックは独自の道を歩み出したのであった。すなわち、中央チベットの武力的崩壊が各地に豪族の抬頭を許したのと同じ形態で、ラダックを含む西方チベットには中央チベット、ウから離れ、ガリ (Mñah-ris) 地方として、1つの自治区の形態を整え、ウツァン (Gtsaŋ) に対する別個の地域として独立の形を作り出し、それに伴ってラダックの独立も形成されたと見るべきであろう。

ガリ地方の独立的形態は、ランダルマの子、ウスン (Hod-sruñs, 842—870) の出現によって始められた。ガリ地方を構成する地域区分はラダック・グゲ (Gu-ge) ・マンユル (Mañ-yul) ・プラン (Spu-rañs) であるが、これらのうち、グゲが最も強力であり、西チベット、ガリ地方の中心をなしていた。“ラダック年代記”の記すところによると、当初すなわち、ウスンの孫、キデニマゴン (Skyid-lde ni-ma-mgon, 900—930) の頃までは、ラダックはバプゴ (Bab-sgo) とサポラ (Sas-po-la) 間の台地を境として、上部ラダック (La-dwags stod) と下部ラダック (Smad-rnams) に2分され、前者はゲサル (Gesar) の子孫⁴⁾によって維持され、後者は更に幾つかの独立公国に分割されていた⁵⁾。その後、ニマゴンの息子達の時代となって、

sras gsum ni, lha-chen dpal-gyi-mgon, bar-pa,
bkra-śis-mgon, chuñ-ba lde-gtsug-mgon dañ gsum-
mo, de-nas sras gsum la mñah-ris so-sor gtañ ste,

che-ba dpal-gyi-mgon-la mñah-ris mar-yul, 6)……

(ニマゴン)の息子は3人居り、(長兄は)ラチェンベギゴンであり、次兄がタシゴン、末弟がテツゴンの3人であった。彼(ニマゴン)は、(これら)3人の息子達にガリ地方をそれぞれ与え、長男のベギゴンにはガリのマルユルを(与え)云々……

とあるように、ガリの地全域がウスンの孫、ニマゴンの時代にはすでに彼の治下に入っていたことが知られるのである⁷⁾。

かくて吐蕃王朝の断絶に伴って成立したラダックの独立は、この頃、チベット全域に亘って出現した群雄割拠の形態の1つの現われとして、ガリ地方が中央チベット、ウから分離し、ガリ地方の一部としてのラダックの独立という形で成り立ったものであった。しかも、ウスンの出現によって見られるように、ガリ地方一帯のなかで、グゲ・プラン・マンユル等と一体となって相互に関連し合いながら、いわばガリ王国の一地方州のような立場に立って、その治世が行われたものであろう。

(2)

中央チベットの武力的束縛から離れて、独立の形態を保ったラダックは19世紀の前半にドグラ (Dogra) 戦争に敗れ、グーラブ・シン (Gulāb Sing) に征服されるまでの約千年の間、ラマ教を中心とした文化を形成し、そして、独自の教義もその地域全般に侵透して、今日のいわゆる小チベットを作り上げて来たのである。が、その間、全く平穩な時期を過したわけではなく、数度に亘って異教徒の侵入を受け、彼等の信奉する宗教を維持することを阻げられたのであった。

独立期のラダックの人人が最初に経験した戦いは1531年のカシュガル (Kashgar) とのものであった。カシュガルは現在、中華人民共和国とソビエト連邦の国境に近く、中国の最西端、新疆ウイグル自治区内にあり、古く中国の史書で疏勒国と呼ばれる地である。唐末から宋代にかけイスラム化され、元代にはその支配下にあったが、元朝滅亡後はカシュガル・ハン国として、独立したイスラム王国を形成した。清代になっても、清朝に対する反抗は強く、しばしば、イスラム教徒による独立運動も展開された。“ラダック年代記”には、このカシュガルとラダックとの戦いについて、

hor gyi dmag byuñ-ba la ḥṭhab-bas hor-mañ-po bsad,
rnam-rgyal-rtse-mor mgon-khan bsheñs nas, hor
gyi ro thams-cad mgon-poḥi shabs-hog tu mnan⁸⁾,
蒙古(カシュガル)の軍隊が侵入して来たのに対して、

(タシナムゲ王は)多くの蒙古軍を打殺し、ナムゲツェモに仏殿を建立して、総ての蒙古兵の死体を(その仏殿に祀る)仏の御足下に埋めたのである。

と、戦いはラダックの一方的勝利に終わったように簡単に記しているが、“ラダック年代記”の英訳者であるフランケ(Francke)は自らもラダック遠征の経験者であるハイダル・ミールザー(Haidar Mirza)の著述であるラシードの歴史(Ta'rikhi-Rashidi)を引用して、タシナムゲはトルコの軍隊によって、恐らく1532年、殺されたのであろうと述べている。事実がフランケの推測の通りであるとすれば、時の国王が異教徒であるトルコ系モスラムによって討ちとられたこの戦いは、ラダックにとって、重大な危機を招いたものと云わなくてはならないであろう。

次にラダックが経験した異教徒との戦いは17世紀初頭、ムガル(Mughal)朝傘下のバルーチスタン(Baluchistan)による侵入であった。すなわち、センゲナムゲ(Señ-ge-rnam-rgyal, 1590—1635)治下のラダックに対し、南蒙古の一地方であるベーチ(Sbal-ti)の王、アダムカン('Adam-mkhan)が侵入してきたのであった。この戦いではベーチ軍の武力は非常に強大で、グゲをはじめとする各地の王は廃され、また捕われなどし、侵入はガリ地方に留まらず、中央チベット、ウならびにツァン(Gtsan)の地にまで及び、ウ・ツァン地方の王、デパツァンパ(Sde-pa gtsan-pa)の如きはラバ教駄の金銀・茶等をアダムカンに献じたといわれている。ただ、“ラダック年代記”が報じているところによると、この争乱の間であって、センゲのみは、アダムカンに対して大いに恭順の意を表し、ラダックの地にその軍隊ともども戻ることを許され、マンユルをはじめとしてグゲ・ブラン等東方一帯の地をその版図とする王位につき、金鉱採掘権等をも手中に収め、ラダックの地は逆に拡大され繁栄したと、この戦乱の結末を目度く結んでいる⁹⁾。センゲナムゲが、どのような手段によって身の安泰を得たのか、“年代記”にいう thugs-hgu (thugs-mgu 喜びの心、満足の気持)とはアダムカンに対して具体的にどのような表現となったのか不明であるが、トゥッチ(Tucci)も述べている如く¹⁰⁾、ラサ(Lha-sa)のポタラ(Potala)宮殿と時を同じくして、ラダック王の宮殿がセンゲによって建設されたこと、ならびにヘミ(Hemis)の僧院もセンゲによって建立されたと云われている等の事柄から見る限り、センゲナムゲはラダックにとっては歴朝特筆大書すべき偉大なる王であり、その政治的手腕にも秀でたものを持った王であったのであろう。

が、その事とは別に、ラダック地域にとって、イスラム系蒙古の大軍がその地に侵入した事は、兎も角もラダック史上、大きな危機を示すものであったであろう。

ラダックへの次の侵寇は、センゲの孫に当るラチェンデレクナムゲ(Lha-chen Bde-legs-rnam-rgyal, 1645—80)の治下に起ったものであった。この争乱は、もともとブータン(Bhutan, Lho-hbrug)とチベットとの間の確執によって出発した。当時、チベットは5代ダライ・ロサンギャムツォ(Blo-bsañ-rgya-mtsho, 1617—1682)の時代で、5代が蒙古王・固実汗から主権を贈られ、法王即国王の形態が確立した、ダライ・ラマ(Dalai Lama)制の樹立した時期であった。この争いにラダックが参画した理由は、当時のブータンの長老ラマが同時にラダック王の指導僧でもあった事から、ラダックはブータンと共にチベットに対して事を構えることとなった。たまたま、この時、ガンデン(Dgañ-ldan)寺にツェワン(Tshe-dbañ)と称する蒙古人(Sog-po)のラマが居り、推されて還俗の上、戦闘の指揮官となって、蒙古軍ならびに強力なチベット軍隊を率いてラダックに侵入した。一方、ラダック王はカシミールに援軍を依頼したので、各地の軍隊が入り交り、3か年に亘る大激戦となったのであった。この戦いの結末について、“ラダック年代記”によれば、戦火が3年の長きに亘る膠着の状態に陥った事と、これ以上それが拡大することを恐れたラサ政府がラダック王の許に使を送り和平をすすめ、ラダック王もこれに同意した。そして、終戦処理に伴ってさまざまな通商上の取決めが行われ、またラダックの地域区分については、かつて、キデニマゴンが3人の息子にその地を分割して与えた状態に戻すこと、但しこのことについて、チベット政府としては、ガリの地とカシミールが境界を接することに一抹の不安を感じていた。すなわち、

bod nañ-pa dañ, kha-chul phyi-ba-sogs ni phyi nañ gi chos-lugs so-sor, dgra win pas, sa-mtshams su la-dwags-rgyal-po ma bde na, bod mi bde-ba¹¹⁾。

チベットは仏教国であり、カシミールは非仏教国である。非仏教と仏教とはそれぞれ教えが異なるものである。(相互の)敵意によって、その境界についてラダック王が平穩を保てないこととなれば、チベットも平穩ではあり得ない。

と、異教徒によるラダックへの侵入が直接的に中央チベット、ウの危機でもあることを指摘している¹²⁾。

ラダックがその勢力下に領有・併呑されざるを得なかった戦いはジャム(Jammu)のシーク教徒(Dogra)との争いであった。この戦いは1834年から前後8年間にも

亙って行われ、その内容については“ラダック年代記”に詳しく触れている¹³⁾。ただ、この侵入の実際については諸説異なるところがあるので、“ラダック年代記”の校訂者フランケは“年代記”の説ならびにカニンガム(Cunningham)そして、ドグラ戦争に参戦の経験者であるツェタン(Tshe-brtan)老人の体験談の三説を比較紹介している¹⁴⁾。がこの戦いの結末については、三説とも殆んど全同で、“年代記”では貿易上の協定と境界が確定したこと、ツェタンは捕虜の交換が行われたこと、カニンガムはラダックとラサ、すなわちチベットとの古い境界が再び確認されたこと等をそれぞれ、その結末としている。

(3)

ラダックがその独立期に異教徒の侵入という地域的・国家的危機に直面した事実について、“ラダック年代記”をはじめとする各史料は、それがラダックに伝わるラマ教にとって、宗教的危機であったというような点には殆んど触れていない。わずかに、ドグラ戦争の折、ヘミ僧院が食料・軍馬の提供等で協力した事実を述べる¹⁵⁾のみで、これらの戦乱がラダックに伝わるラマ教に与えた影響等には言及していない。が事実、ラダックへの異教徒の侵入のなかで、ラマ教はその寺院・教団もしくは教義への弾圧を何等蒙ることなく過し得たのであろうか。

そもそも、ラダックと仏教の関係であるが、カニンガムはその著“Ladāk”において、B.C. 250の頃、Aśoka王の時代に、すでにラダックにおいては仏教が prevailing religion (流布された宗教)であったと述べている¹⁶⁾。また、4世紀、東晋代、長安を発ってインドに求法の旅を行った法頭の旅行記によれば、当時、ラダック地域一帯に仏教が盛んであったことが報告されているとも述べている¹⁷⁾。そして、上述の如く、ソンツェンの時代のチベットがカシミール地方と交流があった事が事実であった以上、何等かの形でチベットとラダックは交流を持ったと考えられるのである。さらに、8世紀後半にはチソン治下のチベットの版図中にラダックが含まれていた事も推測されるので、同じく、何等かの形でラダックはチベット仏教の影響を受けたと考えてよいであろう。そして、ランダルマの破仏によって中央チベットを追われたラマ達が生ラダックに逃れ、チベット仏教を将来した事は十分考えられる。また、10世紀におけるキデニマゴン治下のラダックの統治形態は上述の如く明確にすることが出来るのである。ところが、10世紀から16世紀のカシュガル侵入前までの500年間に亘るラダックの歴史は殆

んど不明であるのが事実である。このラダックにおける歴史的ブランクを埋めることは頗る困難な事業であろうが、その作業を推し進める一助として、この間、すなわちインドにおける末期の仏教の歴史と、チベットの歴史によって、これらとラダックとの交流を推測することは可能であろう。

法頭がインドに旅した頃の4世紀以降のインド仏教の歴史は大乘についていえばすなわち密教史であり、その推移は次の如くであった。

4世紀の頃	初期の密教經典成立
7世紀初頭	密教の始祖竜猛(Nāgārjuna)出現
7世紀中葉	西南インドで大日経成立
7世紀末	東南インドで金剛頂経成立
パーラ(Pāla)王朝治下	密教の隆昌期(8世紀中葉から12世紀末まで)
8世紀	左道密教の創始者インドラブーティ(Indrabhūti)出現
1203	密教の根本道場ヴィクラマシーラ(Vikramaśīla)が回教徒に破壊され、インド仏教は急速に衰微した。

一方、10世紀から16世紀にかけてのチベット仏教の動きを同じように表示すれば、

10世紀中葉	リンチェン(Rin-chen bzah-po)が秘密教を復興した
同じ頃	コルレ(Hkhor-re)王統をつぎ即位し王統の一時的復興なる
同じ頃	アティシャ(Atiśa)入蔵
13世紀中葉	クビライ(Khubilai, 忽必烈)のチベット制王
同じ頃	バクパ(Hphags-pa)帝室の国師となる
13世紀末	プトン(Bu-ston)出生
同じ頃	バクパ、クビライより主権を贈られ、サキヤ(Sa-skya)王朝成立
14世紀中葉	ツォンカパ(Btson-kha-pa)出生(—1419)
同じ頃	元滅亡
14世紀末	ツォンカパの宗教改革
15世紀末	初代ダライ、法王即帝王となり、實質的法制成立
17世紀初頭	清朝成立

以上の如きインド・チベット両仏教がラダック地方に対して何等かの影響を与えたとすれば、インド仏教について云えることは、ラダックの地に密教が伝播したということである。法頭の時代、すでにラダック一帯に仏教が“流行の宗教”であったとすれば、まさにその仏教は密教であったであろう。ラダック仏教がインド密教とランダルマの破仏によるチベットの逃避僧によるラマ教の混沌によって成立したと云われる所以のものである。一

方、チベット仏教との交流については、バサムジュンサン (Dpag-bsam-ljon-lzañ) にはサキャパの祖と仰がれているタントリストビルーパ (Virupa) がマンユルを三度、訪問した事が記されている¹⁸⁾。17世紀は、その初頭にヘミの大寺院も建立されたいわば、ラダック仏教の黄金時代と呼ぶべき時期であろうが、この頃になると、チベット史料にツァン (Gtsañ) 王が西方ラダック王センゲナムゲと干戈を交えなければならなかった事、5代ダライの摂政サンゲギヤムツォ (Sañs-rgyas rgyas mtsho) がゲルクパ (Dge-lugs-pa) に抵抗したセンゲナムゲの息子デデンナムゲ (Bde-ldan rnam-rgyal) と戦わねばならなかった事¹⁹⁾等政治的交りがあったと記録されているが、しかしながら、同じ頃、チベット仏教史の上で、特筆すべきツォンカパによる改革仏教の出現やダライラマ制の成立が14・15世紀のラダックにどのような影響を与えたのか、あるいは何等影響するところがなかったのか等、総じて、チベットとラダックが直接的にラマ教を媒体として交流した事実を史料の上で読みとることが出来ないのが現実なのである。兎も角も、ランダルマの破仏事件後、中央チベットから亡命したラマ僧達によって伝播されたチベット仏教が、その後、今日まで千百年の長きに亘ってラダックの地で、その土地なりに保持され受け継がれて、他民族・異教徒の数度に亘る侵入にも拘らず、今日のラダックの地に継承され得た理由は奈辺にあるのであろうか。

考えられる理由の第1は、ラダック一帯の地域における王ならびに住民のチベット民族に対する民族的連帯感であろう。ラダック地域における住民が、その始祖をチベット民族に置くことは、たとえ、歴史的に如何なる経緯をたどってチベット民族の一部がこの地に定住するようになったのか不明であるにはせよ、問題のない事実であろう²⁰⁾。そしてこのことが、彼等のチベット民族としての意識がラマ教を支え、異民族の宗教であるヒンズー教やシーク教を拒否し得た一つの理由であろう。第2に、インド密教の下地がラマ教の受容を容易にしたのではなかろうか。上述の如く、アショカの時代までさかのぼる事には問題があるにはせよ、隣接のカシミールの地との接触によって、末期の大乗仏教である密教に接した事が、ラマ教の秘密教的色彩に、染まることを彼等は躊躇なく受け入れたのではなかろうか。ラマ教のなかでも、ツォンカパによる改革以前のタントリックな、呪術的要素の濃い宗教に彼等は心の平安を求めたのであろう。このことが、旧教紅帽派に属するヘミ僧院がラダックに唯一のものであれ、最大の寺院として君臨し得てい

る理由であろう。少なくとも、彼等ラダックの人々にとっては、一切の偶像を否定する回教の如き宗教は好みの宗教とはなり得なかったのであろう。第3に、ラダックを中心とするこの辺り一帯すなわち、ガリ地方の行政的立地条件を挙げることが出来よう。前述の如く、ガリ地方はグゲ・マンユル・プーランそしてマルユルの4部をもって形成された。そして之等の4部、4つの国々には相互に関連し合い、時には互いに支配し、隷属し合いながらも共存して来たのであった。この事が他民族の侵入に対して全面的な壊滅をまぬがれるという結果を齎したのであろう。そして、そのなかで、チベット伝来のラマ教の灯をこの地域一帯に絶えることなく点し得たのではなかろうか。

おわりに

ラダックにおけるチベット仏教の展開を追尾する上で、障害となる事の第1はラダック地域の歴史的境界規定であろう。第2にチベット仏教との交流の歴史の不明確さ。第3にラダックの歴史そのものについて、現段階では不明の個処が余りにも多すぎる事。これらの障害の上に立って、ラダックにおけるチベット仏教を究明しようとするれば、その大半は推論の域を出ないものに終らざるを得ないであろう。事実、本稿の記述もその大部分は推測を中心としてなされた。Petetch, Cunningham, Francke 等、現地を踏査した上で各種の基本的資料を駆使した労作が世に送られ、特に Francke の如きは“ラダック年代記” 原本の校訂英訳ならびに詳細な註記を附した大著を出版した。しかしながら、之等の資料に基づいて、ラダックにおけるチベット仏教の究明を行おうとしても、なおかつ、不明の点は多々存すると云わざるを得ない。

今日の時点で、イソド領ジャム・カンミール州に属するラダック地域にラマ教が保持され、その地域が小チベットと呼ばれている現実から、この地域におけるラマ教の沿革を探ねたいと願うことは当然の欲求であろうが、逆にラマ教自体やチベットそのものにとっては、ラダックという地域が特別な場処ではなく、チベットの一部であり、ラマ教圏の一環なのであろう。だからこそ、チベット側の資料によっても、そこでの歴史的出来事は、チベットそのものの、或いは一地域の出来事としてしか受取っていないのである。このような点からも、ラダックにおけるチベット仏教の展開を究明することは、すなわちチベット仏教そのものの展開を究明することとなるのであろう。ラダックの地域的歴史について、更に厳密な

検討を加えると同時に、チベット仏教そのものの地域的考究を行うことが、ラダックのラマ教探究の重要な方途となるのである。

註

- 1) ラダックと呼ばれる地名はチベット語では la-dwags であるが、さらに、ラダック地方を指すか、この地域を含める地域に対する呼称として mar-yul, mañ-yul がある。A. H. Francke の見解によると、“Ladakh, the Persian transliteration of the Tibetan La-dvags……. Mar-yul and Mañ-yul include Upper and Lower Ladakh, Nubra, Zañs-dkar, etc.” (Antiquities of Indian Tibet vol. II p. 93—94) とあり、Roerich は Deb-ther の英訳本中で、Mañ-yul (Upper of Gtsañ) (The Blue Annals p. 42) としている。Das, Jäschke はともにその蔵英辞典で Mar-yul=La-dwags とし、Mañ-yul=a dirtrict in the upper Tibet bordering Nepal と説明している。Francke はまた、“……in the Sheh inscriptions the word mñah-ris is used inclusive of the whole of La-dakh (同上本 p. 93) とも記している。現在の行政上の区分からいえば、インド領、Jammu-Kashmir 州内の一部で中華人民共和国のチベット自治区ならびに新疆自治区と境を接している地域であることを理解出来るが、ラダックの歴史の変遷に伴って、ラダックの境域を明確にすることは、特にチベットとの関係において困難であり、今後、究明すべき重要な問題であろう。
- 2) A. H. Francke 校訂本 p. 31
- 3) Deb-ther (東洋文庫所蔵本 21a) によると、Khri-sron 代、彼の教えの友として彼の輔弼に当たった Gsal-snañ が同じ Mñah-ris 内の Mañ-yul に 2 か寺を建立した事実が記されているが、このこともまた、間接的ではあるにせよ、ラダックと吐蕃の交流の可能性を示している。
- 4) Francke の註によれば、Gesar は神話時代の王 Keser であり、その名をとって王朝の名とした族長達のグループが存したと云っている。本来、Gesar=Gesar はその武力が余りにも強かったため、戦いの神として祀られるに到った中国の王名で、特にチベット辺境の武勇と勇敢さをもって知られる Kham 地方の人びとも信仰され、また、蒙古人は Ge-sar は蒙古の王であるとしている。

- 5) 上掲本, p. 35
- 6) 上掲本, p. 35
- 7) “Dpag-bsam ljon-bzañ” の記述では 3 人の息子のうち長子に与えたのは Mar-yul でなく Mañ-yul となっており、他の子供達に与えた土地も、それぞれ、“ラダック年代記” の記述とは異っておるが、“年代記” では Mar-yul についてその内容を説明しており、“Dpag-bsam” でも、次男に Spu-rañs を三男には Shañ-shuñ, すなわち Gu-ge の 3 つの領地を与えたと記している。また、Deb-ther (文庫所蔵本 19 b) では Mar-yul となっているから、兎も角も、Mar-yul を含む Mñah-ris 全域が Ñi-ma-mgon の掌握下にあったと考えてよいであろう。
- 8) 上掲本, p. 37
- 9) 上掲本, p. 41
- 10) “Tibet” p. 115, 184
- 11) 上掲本, p. 42
- 12) Sog-po との争いと Dogra War との間に、Mugal による侵入があったが、この侵略について、Francke は上掲、“La-dvags-rgyal-rabs” の vol. 2 に Ahmad-Shāh の Baltistan 年代記を掲載して、本文中には Sultan Murad が Ali Sher Khan に次いで、再び、ラダックを占領したと記されているが、その註のなかで、「Sultān-Murād 治下におけるラダック征服は“ラダック年代記”には記載されていない。この場合征服という言葉は適当でないとは私は推測する。事実は掠奪のための遠征といったものに過ぎなかったのであろう。ラダック側が 'Ali-Sher-Khān 2 世によって行われたものをこのように記録しているのと同じように」と述べている。しかし乍ら、ムガル朝とのこのような接触はラダックのラマ教に何等かの被害を与えたことは事実であろう。
- 13) 上掲本, p. 48—53
- 14) 上掲本, p. 137—138
- 15) 上掲本, p. 50 ; p. 51
- 16) A. Cunningham : Ladák p. 317
- 17) Cunningham : 上掲本, p. 316 ; A. H. Francke : A History of Western Tibet p. 39
- 18) Das 校訂本, p. 104
- 19) Tucci : Tibetan Painted Scroll vol. 1. p. 62, p. 76
- 20) A. Cunningham : Ladák p. 290 参照